

古代ローマの伝説の怪魚

長崎大学所蔵の『グラバー図譜』から毎回一点をクローズアップして水産学部の山口敦子先生に解説していただくこのコーナー。今回登場するのは、コバンザメです。

「コバンザメは、スズキ目コバンザメ科に分類される硬骨魚の仲間、東太平洋を除く全世界の暖かい海に生息しています。サメの名が付いてはいるものの、サメの仲間ではありません。誤解を避けるため、コバンイタダキと名付けられたこともあります。日本周辺に生息するシロコバン、ナガコバン、クロコバンなど七種のコバンザメ科魚類の中でも本種は大きく、最大で全長一メートルに達します。今では全国的にコバンザメの名で親しまれていますが、かつての地方名にはフナシトギ、ゾオリベタ、ソロバンウオなど奇異なものも多く見られました。アヤカシ（福井）、フナイトリ（京都）はいずれも妖怪や化け物のこと。「見かけによらぬ油断のならぬもの」を意味するヤスダイ（和歌山）の名が示すように、その小さな体に見合わず恐ろしくて不吉な生物の象徴と捉えられることもありました。古代ローマの博物学者プリニウスが記した『博物誌』によりますと、第三代皇帝カリ

グラが乗る船に一匹の小さなコバンザメが付着したところ船脚が止まり、四百人でこいでもまったく動かなかったというのです。コバンザメを取り除いてなんとか帰還したものの、直後にカリグラは暗殺されました。もしも船が遅れなければ、運命は違っていたかもしれませぬ。コバンザメ属を表す学名 *Echeneis* は「船を引き留める小魚」を意味し、種小名の *naucrates* は「海の支配者、速い航行を司る魚の一種」を意味するギリシャ語に由来するものです。ヨーロッパなど世界各地に残された古い絵画の数々に恐ろしい頭の形をした怪魚として描かれています」。

なかなか外れない「小判」の正体は？

「コバンザメの体は細長く、体側の中央には薄い灰色の幅広い縦じまがあります。頭部に備わる小判型の吸盤は、成長過程で第一背びれが変化してできたものです。強力な吸着力で、高速で泳ぐ大型の魚や船に付着しても決して外れることはありません。コバンザメが小さくても船を止めるほどの力があると考えられたのもそのためでしょう。学生時代、船べりに付いたコバンザメの吸着力に驚き、その秘密を探ろうとあれこれ試してみたことがあります。吸盤

にある板状のひだは、普段は後方に倒れています。魚が付くとそのひだが起き上がり、びたっと吸着します。しっぽを持って後ろから引っ張っても外れませんが、逆に前に押してやればすっと外れるのも納得です。

コバンザメは強い魚に便乗しておこぼれをちゃっかりいただくばかりの魚とお思いでしょう。時には餌のおこぼれをもらうこともあるようですが、サメやクジラの口やえらの中に入って寄生虫を食べたり、糞便や腐敗した表皮組織を食べたりとせつせとお掃除しているのです。片利共生ではなく、相利共生というわけです。ただし、残念ながらサメの胃の中から見つかることもあるので、うっかり餌となってしまうこともあるようです」。

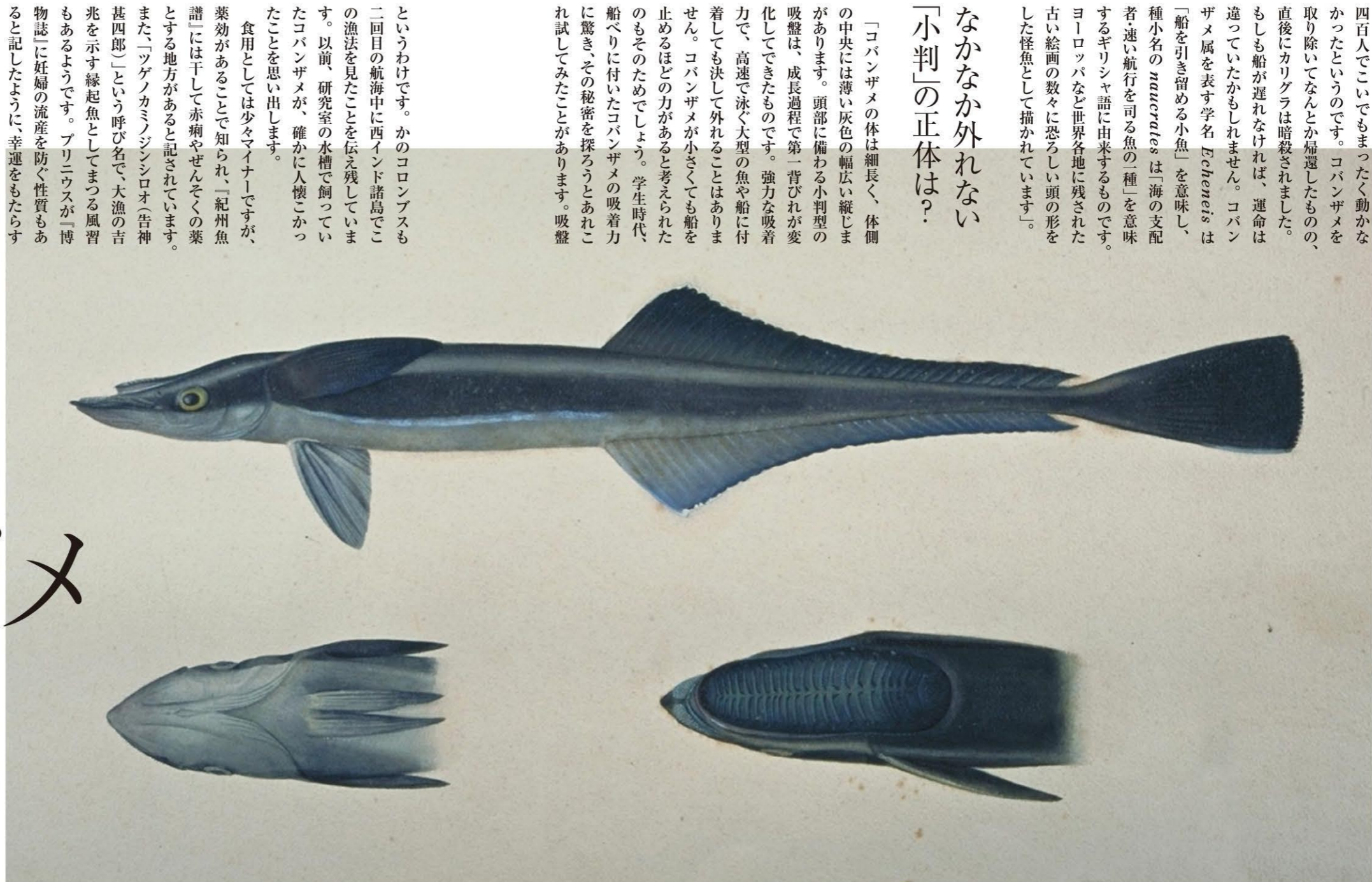
そう聞くと気の毒ですね。

「西インド諸島やモザンビークなどアフリカ東部沿岸をはじめとしたインド洋の周辺地域で始まり、日本を含む太平洋沿岸に広く伝承した、コバンザメによるユニークな漁業があります。コバンザメを小さいうちから飼慣らし、ある程度の大きさになると尾の部分に金具を取り付け、そこに細長いロープをつないでおきます。漁師がサメやカメ、マナティなどを見つけたら、コバンザメを放ちます。コバンザメはそちらに向かって一直接線に泳ぎ、吸盤でくっついたところを漁師が引っ張り上げる

というわけです。かのコロンプスも二回目の航海中に西インド諸島での漁法を見たことを伝え残しています。以前、研究室の水槽で飼っていたコバンザメが、確かに人懐こかったことを思い出します。

食用としては少々マイナーですが、薬効があることで知られ、『紀州魚譜』には干して赤痢やせんそくの薬とする地方があると記されています。また、「ツゲノカミノジンシロオ（告神甚四郎）」という呼び名で、大漁の吉兆を示す縁起魚としてまつる風習もあるようです。プリニウスが『博物誌』に妊婦の流産を防ぐ性質もあると記したように、幸運をもたらす魚としての一面もあるのですよ」。

大漁の吉兆か航海の邪魔者か。不思議な二面性のある魚ですね。



解説 山口敦子
長崎大学水産・環境科学総合研究科教授
Yamaguchi Atsuko
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。2000年から長崎大学。専門はエイやサメなど魚類学と水産資源学の研究。主な著書に「干潟の海に生きる魚たちー有明海の豊かさと危機」(東海大学出版)など。

Glover Atlas

コバンザメ

Echeneis naucrates

画家 長谷川雪香

グラバー図譜

日本西部及び南部魚類図譜

Fishes of Southern & Western Japan

長崎大学附属図書館のホームページでもご覧いただけます。

<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/>

「グラバー図譜」は、長崎の実業家であった倉場富三郎氏が編集したコレクションです。日本四大魚譜の一つであるといわれています。